

『当たり前のこと』

ある校長先生が、滋賀県大津市にある比叡山延暦寺根本中堂で学んだことを次のように紹介しています。

比叡山には、最澄が延暦寺を開いた1200年以上も前から、大切に守られている宝があるそうです。それは、最澄が修行でつかっていた炎の灯火で、現在まで消さずに守り通しているのだそうです。

延暦寺はこれまで何度も災害に遭いました。その中には、織田信長の延暦寺焼き討ちもありましたが、それらの苦難の中でも守り通された灯火が延暦寺根本中堂にあるということです。灯火を守るため、菜種油が切れないように注ぎ、炎の芯が燃え尽きそうだと新しい芯に代えるという、そういった営みを長きにわたって続けてきたのだそうです。

その校長先生は、その灯火を見せていただき、1200年以上守り続けられてきた灯火が世界中のどこにあるだろうか。まさに、日本の宝だと思ったそうです。灯火を見ているうちにある疑問が湧いてきたので、思い切って高僧に問いかけてみたそうです。

「灯火はなぜ、守り続けられてきたのですか。灯火の係りとか、組織の中の役割がしっかりとしているのですか。」

高僧は静かにこう答えたそうです。

「係りや役割を決めたら、何年かはうまくできるかもしれませんが、しかし、役割を決めた瞬間に“だれかの仕事”というように甘えの心が出て、他人ごとになってしまうのです。

そこに失敗の原因が隠されているのです。

比叡山では、だれも役割はもっていません。気づいた人が油を足す、気づいた人が芯を代える。我々が命に代えて守らなければならないものです。役割や係分担任で行うものではないのです。

油が切れたら灯火は消えます。心に迷いや怠慢が満ち、当たり前ことができなことを指します。このことを『油断』というのです。

この言葉は、比叡山の灯火を守ることから生まれた言葉なのです。」

その校長先生は、高僧が話したことを聞いて、当たり前のことを行いつづける大切さと難しさを教えてもらったと述べています。

さて、何を当たり前とするかの判断基準を見定めるのが非常に難しくなっているのが今の世の中です。あらゆる価値に対する人々のとらえ方、考え方が多様すぎているのと同時に、ネット社会における膨大な情報が飛び交い、その情報処理に人の心がついていけないといったことが日常茶飯事となっています。そのことが人の心に迷いを生じさせます。

延暦寺の僧たちのように灯火を消してならないという強い共通意識が、気づいた者は行うという当たり前をつくり出しています。当たり前ができないということは、迷いや怠慢が満ちたときとあります。おそらく迷いとは、当たり前を知っているが、確固たる信念がなく、どうしてよいかわからずに結局何もしないでいた。また、怠慢については、自分がやらなくてもだれかがやるさといった意識なのかもしれません。これは当たり前を実践しない、できないということであり、当たり前を知らないことと同じといえます。

このことをいじめの問題に置き換えてみると、「いじめはよくない」ということは当たり前のこととしてだれもが知っているのですが、心の迷いが生じて、つい仲間外れをしてしまう、いじめがあることをどうしてよいかわからず見て見ないふり、自分がかかわらなくてもだれかがやめさせるなどという考え方していると「いじめはよくないという当たり前」は、絵に描いた餅にすぎません。

「油断」という言葉が生まれた延暦寺の灯火の話から、当たり前を実践することとはどういうことなのかについてあらためて考えさせられました。